便教会新聞

第172号
令和4年7月

便教会は、教師の教師による教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高めることを目的としています。

便教会新聞発行責任者　高野修滋
〒四四五―〇八〇二
愛知県西尾市米津町天竺桂二七
T/F　〇五六三―五六―四三二七
携帯　090 - 4215 - 1727

らない人が多いですね。そうすると後になってあのときやっておけばよかったと思うこともあるんですね。そうしますとやらないで残した後悔というのはいつまでもずっと続くんです。たとえそれが小さなことであっても続くんですね。例えば皆さんが道を歩いているときに缶が落ちていて、拾おうかなぁと思ったとき向こうから人が来てやめて通り過ぎちゃった。あのときに拾っておけば良かったなぁといつまでも自分の頭の中に残って自分を苦しめるんですね。ということで世の中のためになる、人のためになる、国家のためになると信じたことは、どうであってもまずスタートすることがとても大切だと思います。そのことをユダヤの格言が実にわかりやすく教えてくれていますね。どうか皆さん、平地に富士山を築こうと決意と勇気を持って進んでいただきたいですね。私は掃除を通して、仕事を通して日本全国に行きました。かつてその地域を支える産業が今はなくなっている。代表的なものとして日本では林業が盛んでしたが、山間地に行っても林業で生活する人はたくさんいました。ところが世界が狭くなって世界の産物が日本に入ってくるようになった。そうしますと日本の産業が消えてしまうということがよくあります。そうなるとほとんどの人たちが「昔はこうだったけど、それがなくなってしまって今はこうなりました」と言うんです。例えば福岡県大牟田市は三池炭鉱、日本では有名な炭鉱で一番炭層が厚くて良質な石炭が産出されたんです。かつて昭和二十年代、東京大学を卒業して成績の良い人が炭鉱に就職したんですね。そういう時代があったんです。ところがご承知のように、海外の露天掘りの石炭にはかなわない、海外の方が安いということで日本の産業がダメになってしまった。そうしますと日本は三池炭鉱に依存をしていましたから、一番頼りにしていた柱がなくなってしまうと、家でいうと大黒柱がなくなり、梁もなくなった状況です。私が初めて大牟田市に講演に行った際、「三池炭鉱が閉山になったからこうなってしまった」とみんなが言うので、「皆さんがそう言ってたら三池炭鉱がまた始まりますか」と尋ねたら、「それは絶対にあり得ない」。だとしたらあり得ないことをいつまでも言っていないで、自分たちの手でできることをやりましょうと提案したんですね。自分たちの手でできることは何か。この汚いゴミだらけの草だらけの町をきれいにすることだったら誰にでもできる。特別な才能、能力がなくても今日からできるんです。今からやろうと思えばできると提案をして、私は大牟田駅のトイレ掃除を一緒にやりました。回を重ねるとその地域の住民だけでなく、市役所の職員、警察、消防も出てきてやるようになった。どんどんきれいになって手応えが出てきて、街が良くなっていくことを実感されましたね。ということで最初、どんなに良いことであっても上手くいくとは考えられないですね。その壁を越えて取り組んでいく。やがて大きな力になるということを私は自信を持ってお勧めいたします。

【編集後記】「蓬麻中（よもぎまちゅう）に生ずれば扶（たす）けずして直し」（人は育つ環境がよければ、その感化を受けて自然と善人になるということ）大牟田市の実例が示すように街をきれいにすることですべてのことが好転していきます。出発点は「ひとりから、今から」特別な才能、能力がなくてもはじめられることは「きれいを広げる」ことです。卑近な例として25年前の私は肉体的、精神的に病んでいましたが、トイレ掃除に参加し、夢中になってきれいにした感動が変化をもたらし、今の自分を支えています。鍵山相談役が「自信を持ってお勧めします」と仰っているように、掃除道は良き人生の道しるべをタイムリーに与えてくれますが、続けていれば必ず壁が現れます。昨今のコロナ騒動で活動の自粛、中止が余儀なくされましたが、「今までの努力が無駄になるようなことはしたくない」と決意し、やらなければならないことを実施してきました。コロナ禍を理由に環境美化活動を止めてしまった企業は大切なものを失っています。そこで働く人々の帰属意識が下がり、会社の精神健康度も低くなり、会社の屋台骨が緩み始めます。コロナ禍の恐怖は感染・発病以上に人々から大切なものを奪ったことだと思います。世界は狭くなり、スピードも速くなり目まぐるしさが増し、足下を見失うこともありますが、「掃除、きれいを広げる」行為は不易です。「自分の力で、自分のペースで」。掃除道を続けていると迷い悩んだとき、進むべき道が埋もれずに見えてくるような気がします。　高野修滋　拝

『養護教諭に向けて前進』

東海学園大学
養護教諭専攻　松本怜大

5月22日に行われた愛知県立豊野高校での便教会に生まれて初めて参加した。きっかけは、春学期のゼミ担である梶岡先生、そして便教会の代表である高野先生からお誘いをいただいたからである。一年次の時から梶岡先生にはトイレの重要性や大切さ、トイレ掃除をすると『運気』が上がるなどとたくさんの良いことを聞き、便教会には「一度は参加させていただきたい」という思いがあった。しかし、用事があったり、新型コロナウイルスの影響があったりと一年次の間に参加することは叶わなかった。二年次になり、再び梶岡先生からお誘いをいただき「今度こそは！」と思い参加を決意した。

当日、いつもとは違った方法でトイレ掃除をすると聞いていたこともあり、少し不安な気持ちと、どんな掃除方法でするのだろうという興味が入り混じった気持ちであった。豊野高校に到着し受付をしてもらった際に、まず、若年層から老年層まで幅広い年代の方が参加されていることに驚いた。受付を終え、自分たちの班が決まった後、掃除をするトイレへ向かった。外からでも分かるくらいにトイレの独特な臭いがしてきた。「今からここのトイレを掃除するのか…」と思いながらトイレの中に入り、元からあった道具を外に出した。その後、自己紹介をした。参加者の中には各県を周ってトイレ掃除のボランティアに参加している人や、十年ぶりに便教会に参加した人、高校の教員の方など様々な人がこの便教会に参加していた。ほとんどの人が便教会に何度か参加している人だったので、初めての私は少し不安な気持ちであった。

最初、リーダーさんが掃除をする上でのコツは『コツコツとすること』、『キレイを広げること』と教えてくださった。これから掃除に取り掛かる上で、その言葉を合言葉にして一所懸命頑張ろうと思った。実際にトイレ掃除をする前に掃除道具の説明を聞いた。梶岡先生や東海学園大学の先輩たちからも掃除道具がとても多いと聞いていたが、自分が思った以上に様々な掃除道具があり、これにも大変驚いた。次にトイレの照明器具を掃除した。元の場所に戻すと、はじめに入った時の明るさとは段違いに明るさが増していた。照明器具は一回拭いただけでこんなにも綺麗になるのだと思い感動した。

トイレ掃除で私が担当したのは男子トイレの小便器だった。ゴム手袋はしているものの知らない人が排泄をしていたであろう小便器に手を突っ込み掃除するというのは、とても抵抗があった。しかし「ここまできたら、もうやるしかない！」と思いながら便器に手を突っ込み、こびりついた汚れを一所懸命落とした。そうこうしているうちに、汚れを取りたいという想いの方が強くなり、不思議なことに便器に対しての抵抗が一切なくなった。しまいには、ゴム手袋が破れても便器に手を突っ込めるくらいにまで**成長**することができた。

小便器の掃除は、まずはじめに便器に溜まっている水をスポンジで抜き、その水をバケツへと流した。便器に溜まっている水は臭いを抑える働きをしているのだと聞いたとおり、水を抜いていくうちに悪臭がドンドン増していくことに気づいた。さらに便器にへばりついた尿石をスポンジや硬いヤスリのようなものを使って丁寧に磨いた。だんだんと汚れが取れていくうちにもっともっとキレイを広げたいと思うようになり、便器がドンドン綺麗になっていくのを見てとても嬉しくなった。

便器の掃除を終え、次は壁や床を掃除した。臭いの原因の多くは壁や床にへばりついた汚れから臭うと教わり、掃除を開始した。黄色の柔らかなスポンジで壁を拭き、汚れがあったときはすこし硬いナイロンたわしを使って汚れを落としていった。拭き方にもコツがあり上から下に拭くことによって汚れを効率良く掃除することができた。また、床掃除では円を描くように

タワシを使いキレイを広げるようにと教わった。床の汚れを水で流した後、乾いたタオルを使って排水溝に向かって床の水を集めてくるようにするのであるが、手のひらサイズの雑巾と違って効率よく床を拭くことができた。私の班は褒め上手な人が多く、掃除を進めていく中で雰囲気がとてもよく、仲を深め、掃除意識を高めることができた。

午後からは代表者3名によるお話と班でのグループワークをした。代表者3名のお話ではとても多くのことを学ぶことができた。大野雄文美さんのお話では、大野さんが高校時代、大人を信じることができなかったとお話しをされていた。私は将来、養護教諭になりたいので自分がそのような子がいた時にどのようにアプローチしていけば良いかを考えさせていただいた。2人目の鳥居昌司さんは掃除のことだけでなく日々の日常生活を語っていただいたり、ためになる詩を教えてくださったりした。鳥居さんはお話の中で、「平和」というのは家庭から広がるとおっしゃっていた。自分自身も家族とコミュニケーションを増やしたり、手伝いをすることで、家族の仲をもっと深めていきたいと思った。そしてもう一つ、「人の出会う確率は砂浜の小さな石が隣り合うくらいなんだよ」と聞き、ご縁は大切にしなくてはならないと考えさせられた。3人目の渡邊雅人さんは『私と教育とお掃除』を題に楽しくお話をされていた。渡邊さんは姫路市教育委員会に勤務されていて、自分のことを「パチモン教師」とおっしゃられていたが、お話を聴いているととても素晴らしい人だなと感じた。話を聴く人の気持ちをつかむことが上手で、笑いとともに引き込まれていった。初対面の人、顔見知り程度の人に何かを伝えようとする際、心が開くアプローチ、笑い、緊張がほぐれるアイスブレーキングがとても重要だと気づいた。お話の中にはいくつもの感動するエピソードがあり、こんな教師に私もなりたいと考えさせられる内容であった。そのうちの一つが水泳大会のことであった。選手決めの際に四肢が不自由な女子生徒が意地悪な女子生徒に勝手に推薦され断れず出場した。身体のハンディキャップで上手く泳げず、何度も溺れかけながら必死に泳いでいる姿を見た校長先生が服を着たままプールの中に入り、彼女の側で応援すると、馬鹿にしていた生徒たちもだんだんと応援するようになったというお話を聞き、この校長先生みたいな教師になりたいと強く思った。グループワークで「何故、トイレ掃除なのか」のテーマで自分たちの意見を発表し合った。

今回、便教会に参加してみてトイレが生活するうえでどんなに重要なのか、また、効率の良い掃除方法とはどういうものなのかなど、沢山の学びがあった。これから家でのトイレ掃除は、親や兄弟に任せるのではなく、自分が取り組みたいと思った。そして今、次回の便教会にも予定が合えば是非とも参加させていただきたいという強い想いがある。

『トイレ掃除をより身近に』

東海学園大学
養護教諭専攻　伊黒綾音

中学、高校の部活動（バレーボール部）では毎朝掃除をするのが日課でした。体育館はもちろん、校舎全体を掃除し、校舎内では落ちているゴミを必ず拾うことが部のルールでした。また、私の母はトイレ掃除を大切にしていて、「運も高まるし、かわいい子を産むことができる」と言っていました。母の影響もあり、学校では自ら率先してトイレ掃除をしてきました。

便教会を知ったのは大学生になってからでした。梶岡先生から「トイレ掃除をする便教会」というものがあると教えていただき、大学1年生の冬に初めて参加しました。まず最初に、トイレを掃除するためにスポンジやサンドメッシュなどの数多くの道具を使うことに驚きました。さらに道具と手との距離が近いものほど、汚れの質が伝わってきて、より一層綺麗にできることに気づいたことも感動しました。これを教育の場面で考え直してみました。ひとりの子どもに対する接し方や教師の想いを伝える方法は幾つもあるのだということ、また、様々な角度から子どもを見て、本気で子どもと向き合うこと、それによって結果が変わってくるのだと気づきました。第一回目の便教会ではトイレを掃除することで、子どもとの接し方について自分なりに気づき、学ぶことができました。

二回目の参加となる今回は、『道具を大切に使ってトイレ掃除をする』という目標を立てました。昨年以上に発見したことが幾つもありますが、特に印象に残ったことが2点あります。1点目は強く擦れば良いという訳ではないことです。例えば、タワシは優しく円を描きながら使うと先の部分が潰れずに汚れを落とすことが出来ることに気づきました。また、道具を使うにあたっては、正しく使わないと「もったいない」という感情が湧き出てきました。道具が持つせっかくの能力が無駄になります。使う物は大切に、感謝の気持ちを持って使うことが大切です。2点目の発見として、壁と床といったトイレまわりの環境が大切だということです。今回担当させて頂いた便器は比較的綺麗でしたが、個室にいてなぜだかスッキリしませんでした。理由は壁と床の掃除をした後に分かりました。壁と床を掃除することで、臭いも汚れも取れて、トイレの雰囲気までもがガラリと変わったからです。壁、床は一見すると汚れがないようでしたが、スポンジで壁を擦ってみるとホコリがいっぱい付いていることに驚きました。床はたわしで洗ってみるとバケツの水がすぐに真っ黒に汚れ、こんなにも目に見えない汚れが溜まっていたんだと気づかされました。ここまで徹底してやるトイレ掃除、きれいを広げていくトイレ掃除、これがトイレ掃除の醍醐味だと感じました。壁と床をしっかりと掃除することの大切さに気づくと同時に、これは子どもたちとの関わりにも似ていると思いました。本人をいくら良い方向に導こうとしても、気づきを与えようと考えても、周りの環境が悪ければ、課題解決には至らず、双方で問題を抱えながら抜け出すことができず、環境が想像以上に本人に影響するということです。

午後からは普段は聴けないような貴重なお話を聴くことも出来ました。特に渡邊雅人さんのお話は、引きつけられる話し方はもちろん、その内容が大変勉強になりました。中でも教員の修養については、掃除、特にトイレ掃除は教師の資質向上の鍵であり、糧となることを知り、養護教諭を目指す自分にとって大変重要な気づきとなりました。これからは自分自身を磨くことを意識し、良きご縁を通して一層成長していきたいと強く思いました。グループワークでは、「なぜトイレ掃除？」というお題を話し合いました。私たちの班では最終的に、「トイレ掃除は世界平和ということに繋がり、鍵山相談役への恩返しでもある」ということでまとまりました。トイレ掃除、街頭清掃を含めた掃除は持続可能な社会の基盤でSDGsです。私は鍵山相談役にお会いしたことはありませんが、どれほどすごい人なのかというのはこの便教会を通して知ることができます。また、便教会では名言を聞くのも楽しみです。今回は「悪友は誘い合って堕落する、善友は助け合って成長する」、この言葉が一番印象に残っています。便教会に参加したことで、学校で子どもたちの健康と安全を守る養護教諭として、トイレの清潔が欠かせないことも学びました。さらに2回目の参加ということで良き人との出会いも広がり、綺麗も広がりました。参加することで得るものが沢山あります。このような会があること、沢山の出会い、学びに感謝します。そして養護教諭を目指す自分のテンションを高めていきたいと思います。

『平地に富士山を築く覚悟で』

日本を美しくする会
相談役　鍵山　秀三郎

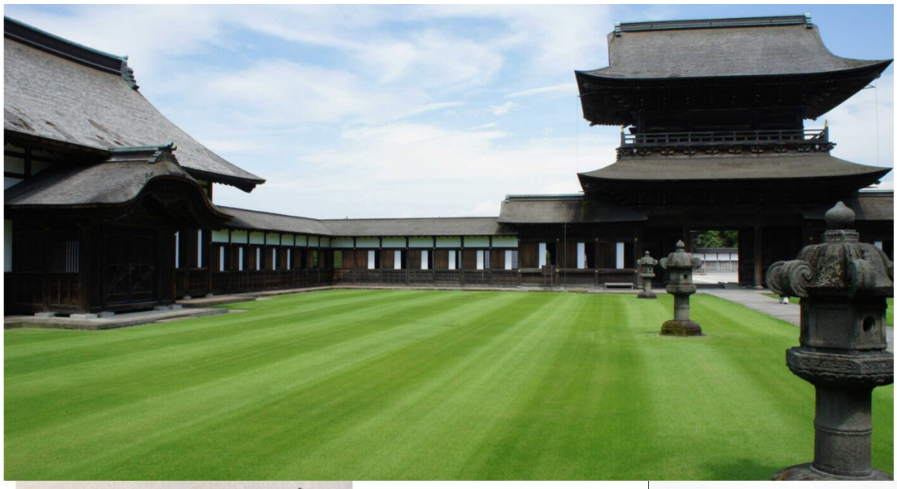
日本を美しくする会の活動は平らな地面に富士山を築くような何にもないところから築き上げてきたような気がするんですね。人がやった後やるんだったら簡単なんです。何にもないところから前例のないところからやるというのはなかなか大変でございます。やり始めてみるといろいろな批判もあり、中傷もあり、いろいろな目に遭います。そうすると、こんなことやらなきゃよかったなぁ…、やって失敗しちゃったということがあります。私はそういう体験を数々して参りました。でも、そういうことがあっても良いと思ったことはやり始めることが大事です。ゼロからはじめるというのは大変なことなんです。昔、市川團十郎が書いた本に「あるとき、弟子を連れてホームにいたら、大きな貨車が止まっていたんです。その止まっている貨車を何人もかかって押したんです。ところが動き始めたら、後は一人で押していった」と書いてあったんです。だから「最初が肝心だ」ということを團十郎は弟子に教えたんです。このように止まっているものを動かす、ゼロから始めるというのはなかなか大変なんですね。ユダヤの格言がございまして、「ゼロから1への距離は1から1000への距離より遠い。」何にもないところから何かを始めるというのは相当な勇気がないとできないですね。始めてみると誹謗中傷に遭って、こんなことやらなきゃよかったという状況がたくさん湧いてきます。そのとき自分の未熟さ、力のなさ、下手だなぁ…、そういうことを思い知らされてますます後悔しますね。でも、ここが大事なところです。良いと思ったこと、正しいと信じたことをやって、そこから生じた後悔は時間とともに消えていくんですね。ところが臆病な人、躊躇する人は「こんなことをして失敗したら大変だ、責任問われたら困る……」という気持ちでや

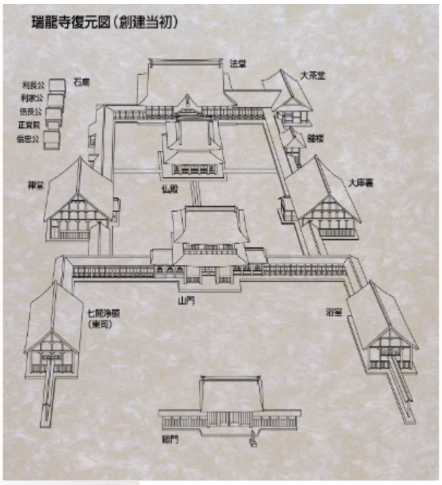
ドラえもんの耳はどこへ

先日、富山県高岡市の曹洞宗高岡山瑞龍寺のトイレ掃除に参加した際、住職から興味深いお話を聞かせていただきました。「ドラえもん」の生みの親は藤子・F・不二雄、本名は藤本弘さんで、かつては安孫子素雄（あびこもとお）んと 1951 年にコンビを結成し、1987 年コンビを解消するまで共同のペンネーム、藤子不二雄を使っていました。コンビ解消後、藤本弘さんは藤子・F・不二雄、安孫子素雄さんは藤子不二雄Ⓐと名乗りました。
藤子不二雄Ⓐ先生は富山県氷見市の光禅寺という古刹に生まれますが、1944 年に父を亡くして高岡市に転居し、そこで藤子・F・不二雄先生（富山県氷見市出身）と出逢われました。Ⓐ先生はお寺の生まれということもあり、高岡山瑞龍寺によく通われました。瑞龍寺には日本最古で最大像（117cm）の烏枢沙摩明王（うすさまみょうおう）（トイレの神さま）が祀られていて、その足下には猪の頭を持つ「猪頭天（ちょとうてん）」が控えています。それをご覧になったⒶ先生は**お札の猪頭天には「耳がある」**が、**実物の猪頭天には「耳がない」**ことを不思議に思われ住職に尋ねたところ、瑞龍寺の言い伝えに『厨子の中にネズミが入ってかじられた』という話があると聞き、あのキャラクターってひょっとすると……というお話です。

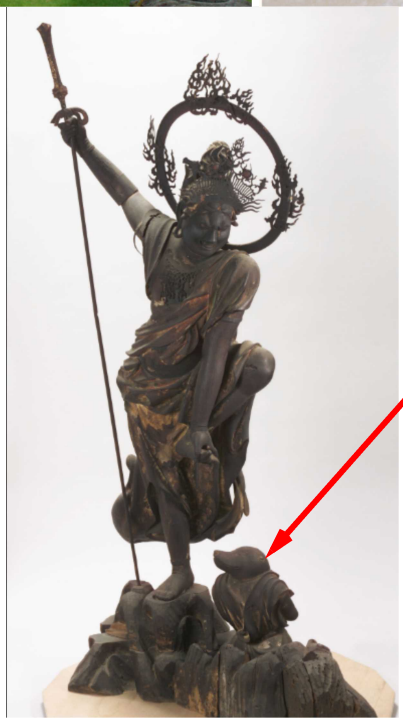
【曹洞宗高岡山瑞龍寺と小矢部掃除に学ぶ会】

曹洞宗高岡山瑞龍寺は加賀藩二代藩主前田利長公の菩提をとむらうため三代藩主利常によって建立された寺で、山門、仏殿、法堂が国宝に指定されています。毎年夏と冬２回、小矢部掃除に学ぶ会が瑞龍寺のトイレ掃除を行っていて、毎年開催を心待ちにしています。その理由は瑞龍寺山門奥の境内が芝生になっていて、その鮮やかな色に目を奪われます。さらに法堂には東司の守護神（トイレの神様）烏瑟沙摩明王が祀られていて、便教会活動のご報告をしています。真言「オン クロダノウ ウンジャク ソワカ」、掃除をしながら烏枢沙摩明王様 に感謝の念を送りご真言を唱えるとよいとのことです。





お札の猪頭天
耳あり



実物の猪頭天
耳なし

令和4年　瑞龍寺冬のお掃除は12月18日（日）詳しくは小矢部掃除に学ぶ会まで